

## 東日本大震災追悼礼拝 — 2016年2月6日(土)

(英語原文より ひで が日本語に翻訳 日本語編集:池住圭・佐々木康一郎)

ローマの信徒への手紙 8.26:「わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです」

「わたしたちはどう祈るべきかを知りません」そもそも、2011年3月11日以降、どう祈るかを知る人など、いるのでしょうか？ あまりにも壮絶な苦しみ。東日本での「被造物のうめき」は、あまりにも深いものでした。どんな言葉も、取るに足らないものとしか聞こえませんでした。それでも日本の人たちは、祈りました。壮絶なまでの悲劇の中にあつて、人々が頭を垂れ、手を合わせて沈黙のうちに祈る姿に、私は痛く心を動かされたものです。あるいは、自分が何に対して祈っているのか分からずに祈っている人たちも、いらっしまったのかもしれませんがね。でも、自分が祈らねばいけないということは、お分かりだったのです。聖パウロの言葉は、私たちが自然に発する祈りは、この一種の不確実性を伴うものだと言っていますね。私たちも神の子どもたちとして、神が我々を愛してくださることを確かに信じています。でも、私たちの祈りとは、不明瞭なものです。私たちの中で、神の霊が祈ってくださるのでない限り。

それから5年が過ぎ、今日ここに私たちは集まりました。あの惨状を、忘れることはできません。今も苦しみ続ける方々のことも、忘れることはできません。今も、仮設住宅にお住いの方々。放射線の影響に苦しむ方々。愛する人を失い、トラウマを抱える方々。壊されたコミュニティ。破棄された町や村。そしてこれからを思う時、私たちは問うのです。今、聖霊は私たちに、何を祈れとおっしゃるのか？ この、弱さと不確実性を抱えた私たちに？ 祈るべきことはたくさんありますが、中でも特に次の3つのことを。

まず、知恵を求めて祈りましょう。予想をはるかに越えた規模と凄絶さだったあの津波は、あまりにも悲惨な自然災害でした。人の作った防御策など、役に立ちません。それでも、危険と変動に溢れた環境にあつても、人間としてどう生きるべきかという知恵はあるのです。震災の翌年、私は東北の東岸部を訪れましたが、無数の歴史的建造物や寺院、神社、古い農家、その他が無傷で残っているのを見て、衝撃を受けたものです。沿岸の平地よりは高台の安全な地帯に建っていたのです。これに対して、海岸沿いの新しい建物は根こそぎなくなっていました。釜石近辺の丘の上に立って、海を眺めていたことを、覚えています。以前、1930年代の津波の時、その地のコミュニティが無事に避難できたのです。そのことを覚える記念碑が立てられていたのです。その石碑には避難できたことへの感謝の言葉が刻まれるとともに、その結びには次の警告も記されていました。「忘れるな、低地には

建物を建ててはいけない」この記念碑のそばに立ち、眼下の低地にある戦後の建築物がつぶれてしまっているのを見るのは、大変痛切な教訓でした。この記念碑にある極めてシンプルなメッセージを、人々が忘れてしまっていたのです。人間が暮らす環境とは、移ろいやすいものであり、そこで生きるための知恵を忘れてしまうというのは、いつの時代も危険なのです。現代の最先端テクノロジーをもってしても、そうした危険は昔より、むしろ増大しています。人間は、謙虚さを学ぶ必要があります。知恵を学ぶ謙虚さ、この地球に住んでいるのは我々だけでないことを認める謙虚さ。伝統から学び、自然界のゲストとして受け入れてもらえるように生きていくべきです。

第2に、解放を求めて祈りましょう。放射能の影響は今も福島とその周辺で害を及ぼしています。昔の人たちの知恵があれば、こんな悲惨なことは、起こりえなかったはずですが。20113月の大災害が今も続き、東日本の各コミュニティの暮らしを妨害している実例としては、これがもっとも劇的な例でしょう。ただし、その他にも人を隷属させている要因はあります。たとえば、災害を逃れた人たちに残る強烈なトラウマ。愛する人が犠牲になったのにその遺体が見つからず、葬儀をすることさえできずにいる、遺族の皆様。地域によっては、ある人が何もかも失い、他の人が何の被害も受けなかった場合もあり、そうしたところでは隣人の間での苦々しい憎悪。世界や日本の他の地域の関心がすでに他の関心に向かい、そのため取り残されたと感じる、怒りや疎外感。これは、理解できる感情ですね。（だからこそ今、東北の皆様に向かって、「皆さんのことを、忘れませんよ」と告げることが大切なのです）こうした問題はいずれも人々の暮らしを掻き乱し、隷属へと陥れます。神の子供たちとしての人間は、自由に充実した人生を送るよう召されているのです。しかし、こうした問題はその人間を、隷属に陥れます。しかし聖パウロは、「被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれる」という約束を記しています。ですから私たちは、解放を祈り求めるのです。人々の生き方を拘束している状態から、また人のスピリットそのものに変革があるよう、祈り求めるのです。拘束しているすべてからの解放を求めて。そして、考え方も生き方も新たにできるように。

最後に、知恵や解放が現実のものとなるよう、希望を持って祈りましょう。希望がなければ、人のスピリットは花咲くことができません。希望は常に、私たちの前にあります。聖パウロも言うように、「見えるものに対する希望は、希望ではありません」すでにあるものを望んでも、希望とは言えませんね。希望は必ずすぐそこにあって、私たちを招いているのです。「いっしょに歩こう」というプロジェクト名が示すように、私たちはその希望に向かって一緒に歩こう、招かれています。日本の聖公会がそうした来られたように、その他にも多くの宗教団体やコミュニティのグループがしてこられたように、人々と一緒に歩くことが召命なのです。人々が生きていくことの意味を見いだせるよう、自信を取り戻せるよう、生きるために必要なスキルを回復できるよう。とりわけ、そうした行動すべての根底にある者として、人々を愛される神がおられること、その神の愛の中に彼らがいることに、気づいていただきましょう。実際、彼らは忘れられてなど、いないのです。神も彼らを覚えておられます。そして、私たちも。